

新発見資料から再評価する施蛰存の初期文学

徐 曉 紅

施蛰存（1905-2003）は一般に中国 1930 年代の現代派作家として知られている。彼は中学時代から『礼拝六』、『半月』などの鴛鴦蝴蝶派刊行物に投稿し始めた。新、旧文学に学びつつ、自らの作風を模索していた。そして、1923 年、『江干集』を私費出版し、同時に蘭社の旬刊『蘭友』の編集活動に携わっている。1926 年、新文学同人旬刊誌『瓔珞』を創刊し、「春灯」（後に「上元灯」と改題）、「周夫人」の二篇の短編小説を発表した。その後、1929 年頃、施蛰存はフロイドやシュニツラーらの心理分析の手法を取入れ、創作の「新路径」を歩み始め、『將軍底頭』（1932）、『梅雨之夕』（1933）などの作品集を相次いで出版している。特に、『善女人行品』（1933）においては女性の内面心理と社会現実の融合が見られる。

30 年代には文芸大衆化が提唱される中で、彼は「純粹の中国式の白話文」の文体を使い、「獵虎記」（1935）などの「復古風」の小説を試みた。『小珍集』（1936）では社会現実への関心を強めてもいたが、日中戦争開戦後には、創作を中止したため、計画していた長篇小説『銷金鍋』、『浮漚』は結局完成されることはなかった。

施蛰存の前半生は以上のようにまとめることができる。これまでの施蛰存研究において、彼の初期創作は不明とされてきたが、筆者の調査によれば、『民国日報』副刊「覚悟」1921 年 9 月 2 日掲載の「蟹」という新詩（蛰存と署名）が彼の最初の詩作であり、「覚悟」1921 年 9 月 11 日掲載の「廉価の麩包」が彼の最も早い小説と考えられる。この小説は餓死寸前の乞食の白昼夢を描き、貧困問題や暗黒社会への批判意識を表出しており、プロレタリア文学の先駆的作品と見なしてもよいであろう。

(2)

旬刊誌『蘭友』はこれまで研究者にあまり注目されていなかったが、筆者の調査によれば、施蛰存は多くの旧体詩作や短編小説などを発表しており、資料的価値が高い。また、施蛰存が『蘭友』や鴛鴦蝴蝶派刊行物に掲載した小説は、多様な題材を取り上げ、特に人物の内面を注視する点が特徴的であり、白話や半文言半白話の文体を用いている。中国伝統小説の語り方を踏襲する一方、西洋文学のプロット構成や叙述スタイルを取入れてもいる。

施蛰存が私費出版した小説集『江干集』(1923)は、様々な社会問題に着目し、若者の恋愛問題や親子関係、農村と都市の格差などを題材としており、今回新発見の「答香港 CCC 君」、(『最小』報第 164 号、1924 年 3 月 5 日)では、『江干集』執筆の際、特に人間の心理描写を念入りに行ったと語っている。これは『江干集』の作品解説に大きな示唆を与えている。さらに、『虎林』第 5 期の「青萍談吐」(1923 年 5 月 26 日)、『最小』報第 92 号の「新旧我無成見」(1923 年 9 月 7 日)では、施蛰存の新/旧文学に対する率直な意見が語られており、当時の彼の新旧未分化の文学観がうかがえる。これら新発見の文章は、施蛰存が文学出発期において抱いていた文学観や、後に新文学へと転身するに至る彼の思想的変遷を解明するための貴重な手掛かりを提供しているのである。

本稿ではこれまで施蛰存の初期作品群を以下のように発表順に整理した。初期作品群は主に鴛鴦蝴蝶派刊行物に掲載されたためであろうか、管見によれば「*」印の 11 点を除いて、研究者の注目を受けたことはなかった。なお、『蘭友』は原本を上海図書館のみが蔵しており(ただし第 1 期から第 4 期まで欠巻)、筆者は 2007 年 9 月 5 日に閲覧調査を行ったが、痛みが激しいため、今後は新規の閲覧は難しいことと思われる。

1921 年 (17 歳)

9 月 2 日、新体詩「蟹」を『民国日報』副刊「覚悟」に発表。署名蛰存(「蛰存」の誤植か?)。

9 月 13 日、短編小説「廉価的麪包」を『民国日報』副刊「覚悟」に発表。

署名施太邱。施太邱は施蟄存が外国の人名から作った筆名の一つである。

1922年（18歳）

*4月1日、短編小説「恢復名誉之夢」を『礼拝六』¹⁾第155期に発表。署名青萍。青萍は施蟄存の筆名である。

*5月13日、短編小説「老画師」を『礼拝六』第161期に発表。署名所属施青萍、松江第三中学。

*6月25日、短編小説「寂寞の街」を『星期』²⁾第17号に発表。署名施青萍。

11月26日、評論「新婦女之敵」を『婦女旬刊』第90期に発表。署名施蟄存。

1923年（19歳）

*3月2日、短編小説「伯叔之間」を『半月』³⁾第2巻第12号に発表。署名施青萍。

3月11日、「小説家語録」を『蘭友』⁴⁾第七期に発表。署名青萍。

3月21日、「小説家語録」、旧体詩「不忍詞」を『蘭友』第八期に発表。署名青萍。

4月11日、「紅禪記」(一) 玉碎記「不忍詞本事之一」を『蘭友』第十期に発表。署名青萍。

*4月16日、散文「山歌綴俊」を『半月』第2巻第15号に発表。署名施青萍。

5月1日、「紅禪記」(一) 玉碎記「不忍詞本事之一」^マを『蘭友』第十一期に発表。署名青萍。

5月26日、「青萍談吐」を『虎林』第5期に発表。署名施青萍。

6月1日、「紅禪記」(一) 玉碎記「不忍詞本事之一(三統)」を『蘭友』第十四期に発表。署名青萍。

6月11日、「紅禪記」(二) 執縛記「不忍詞本事之二」を『蘭友』第十五期に発表。署名施青萍。

(4)

*6月14日、短編小説「童妃紀」を『半月』第2巻第19号に発表。署名施青萍。

6月21日、「紅禪記」(二) 執紼記(二統)「不忍詞之二」を『蘭友』第十六期に発表。署名施青萍。

7月1日、「紅禪記」(二) 執紼記(三統)「不忍詞本事之二」を『蘭友』第十七期に発表。署名施青萍。

9月5日、「談莫泊桑の小説」を『最小』報⁵⁾第91号の「關於小説之文」欄に発表。署名施青萍。

9月7日、「新旧我無成見」を『最小』報第92号の「關於小説之文」欄に発表。署名施青萍。

9月9日、「聞名不如見面」を『最小』報第93号に発表。署名施青萍。

9月11日、「名人情書訳話」を『最小』報第94号に発表。署名施青萍。

9月23日、「此亦直訳乎」を『最小』報第100号に発表。署名施青萍。

10月5日、「西湖憶語」を『最小』報第106号に発表。署名施青萍。

10月7日、「西湖憶語」(二)を『最小』報第107号に発表。署名施青萍。

10月13日、「西湖憶語」(三)を『最小』報第110号に発表。署名施青萍。

10月15日、「西湖憶語」(四)を『最小』報第111号に発表。署名施青萍。

10月17日、「西湖憶語」(五)を『最小』報第112号に発表。署名施青萍。

11月4日、「我的名字和別署」を『最小』報第121号に発表。署名施青萍。

11月6日、「我的名字和別署」(続)、「西湖憶語」^{ママ}を『最小』報第122号に発表。署名施青萍。

*11月8日、「紅禪室漫記」を『半月』第3巻第4号に発表。署名施青萍。

11月20日、「致馬鵑魂書」を『最小』報第129号に発表。署名施青萍。

1924年(20歳)

*1月6日、短編小説「聖誕華筵記」を『半月』第3巻第8号に発表。署名施青萍。

*2月5日、短編小説「綵勝紀」を『半月』第3巻第10号に発表。署名施

青萍。

- * 3月5日、「紅禪室漫記」を『半月』第3巻第12号に発表。署名施青萍。
- 3月5日、「答香港 CCC 君」を『最小』報第164号「關於小説之文」欄に発表。署名施青萍。
- 3月5日、「西湖憶語」を『最小』報第164号に発表。署名施青萍。
- 7月16日、「半月小酒令」(補白)を『半月』第3巻第21号に発表。

1925年(21歳)

- * 5月7日、短編小説「棄家記」を『半月』第3巻第4号に発表。署名施青萍。

注

- 1) 『禮拜六』はアメリカ人 Benjamin Franklin が編集した『禮拜六晚郵報』(Saturday Evening Post) に倣って命名された。毎週土曜日、中華図書館から発行。編集長は、王鈍根、孫劍秋。1914年6月から1916年4月まで百期を出版して停刊。また、1921年3月から復刊し、1923年4月まで百期を出版して停刊。編集長は周瘦鵬。
- 2) 編集長は包天笑。大東書局から発行出版。1922年2月から1923年3月まで50期を出版。
- 3) 編集長は周瘦鵬。最初の頃の編集所の住所は周瘦鵬のそれと同じであった。後に中華図書館から発行。第5期から大東書局から発行出版。1922年9月から1925年11月まで全96期を出版。
- 4) 編集所を兼ねた発行所は第六期まで杭州清吟巷七号の孫泉昆の自宅であるが、第七期からは杭州大塔児巷第十号に変更された。1923年1月1日に創刊。1923年7月1日まで全17期を出版。主な編集人は戴望舒、施蛰存。
- 5) 鴛鴦蝴蝶派系列の刊行物である。1922年11月15日、上海良辰好友社によって創刊。1926年6月25日に193期をもって廃刊。張枕緑が編集長。